



TITLE:

追憶文財部靜治先生を憶ふ

AUTHOR(S):

宗藤, 圭三

CITATION:

宗藤, 圭三. 追憶文財部靜治先生を憶ふ. 經濟論叢 1940, 51(2): 245-248

ISSUE DATE:

1940-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131417>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭

故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府^{の發展性}……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く

故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戸正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二
黒正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦
岡崎文規

附錄

彙報

外國雜誌論題

財部靜治先生を憶ふ

宗 藤 圭 三

昭和十五年七月七日、日本の統計學界の育ての親の一人であり、而も現役として、大學教壇上から統計學の發展に甚大な功績を表はして居られた法學博士財部靜

治先生の御永眠によつて、斯界は全く名狀し難き寂寥に蔽はれた。殊に先生より御薫陶をうけた私共にとつては一人の淋しさを痛感せざるを得ない。

私が先生に教へを賜はつたのは今から二十有餘年前の事であるが、其後統計學を專攻する學徒として今日に到る迄、引續き先生の御高教を忝ふし來つたのである。今更の如く、先生を追憶しようと思つても、餘りにも現實的な主觀的印象が強く、之を歴史的な客觀的事象として見るには尙ほ未だ時日の足らざるを思ふ。

先生との御交際においてうけた印象は、多くの點において、取り纏めて云ひ表はし難いやうな斷片的にして且つ突然變異的なものである。

先生は時折り對話の際に、禪問答のやうな言句を忽然と發せられるやうなことがあつて、判斷に苦しむやうな事がないでもないが、良く考へて見れば、その以前に云はれた事との關聯において、一定の常例（先生の常用語）に従ふものを見出し得るのである。先生において受ける印象の突然變異的なものも、云はゞ大

量觀察的に表現して、常例に則つて居るものであることが解る。

先生を追憶するにも、從つて斷片的で突然變異的な云ひ表はし方を借るのが適當であると思ふので、思出す儘を一二述べて見たいと考へる。

私が、學生として講義を聽いた年に、先生の講義は「本論第一章統計ノ機關」まで進んだが、何處かで「僕の統計學は緒論だけでいゝんだ」と云はれたとかと云ふことであるが、先生の大學における講義は統計學の理論の眞髓を實に能く擲んで、その緒論の中に壓縮せられてゐるのである。先生の現代的統計學における大量觀察法並に解折法については、先生の名著「社會統計論綱」において窺ふことが出来るのであるから、先生の統計學の體系は、その講義と右勞作とを併せ見ることによつて窺ひ得られる。

私が教はつた時のノートによれば、「緒論」として全章節の區別なしに、大學ノートの數十頁に亙ると云ふ隨分變つた取り扱ひ方であつて、世に超然たる先生

の姿が思ひ浮ぶ。或時の如きは、先生教室に現はるゝや黒板に随分變つた一句を認めて、素知らぬ顔で講義を進められて居たが如き、全く先生らしい處が現はれてゐる。

先生が我統計學界に残された足跡の最も偉大なるものゝ一つは、何にと云つても、現代統計學の鼻祖 *Chester* を一體系の下に纏めて研究發表して我學界の地位を高められた事である。この勞作は、法律學經濟學研究叢書第八冊「ケトレノ研究」(京都法學會發行明治四十四年六月)として刊行されたもので、この著作より數ヶ月後れて發刊せられた「社會統計論綱」と共に、先生三十一歳の若き新進學徒としての意氣ある研究の表現であり、また先生の學究生活における學的體系の根幹を爲したかのやうに思はれる。

「ケトレノ研究」の敘言において、先生は「本邦統計學ノ研究カ夙ニ高齢ヲ重ネ學科トシテモ亦容易ニ學脩シ得ヘキモノノ一トシテ遇セラル、ヤ恰モ我官私統計機關ノ一部ニ於テ統計吏員ヲ待ツコト頗ル輕薄ヲ極

ムルト其趣ヲ同フスルニ拘ハラズ著者英獨語ヲ學ヒテ其途ヲ誤レルカタメカ、夙ニ此境ニ處シテ疑惑アリ、統計事務ノ幹部ハ必スヤ能吏ヲ索メ統計學理ノ研脩ハ須ラク精微ナルヘシトノ見解ヲ養ヘルコト久シ、……」

と述べ、次いで「今拙作ヲ介シテ世ニ我疑惑ヲ訴ヘントスルニ當リ今後モ持續シテ其解疑ニ努メント欲シツ、自己ノタメニ索メ得タル箴言」として、獨逸古大家 *Seckendorf* 述作中の一句、*„Das Eis gebrochen und durch seine Fehler andere zu einem Mehreren und Besseren veranlasst zu haben“* を掲げて居られる。實にこの句は先生の學究生活の一大モットーであつたかの感がある。即ち先生は右勞作發表後約二十年を経た昭和六年四月日本統計學會がその創立總會を京大樂友會館において開催したその記念講演會開會の辭に、當學會の前途を祝福する念から、右箴言を再び引用せられたのであることからしても解かる。

先生晚年本邦の本草學に興味をもたれ、「南北辨」の論題の下に「東洋經濟學史論、否文明史論」の一端に供

せんとせられ、また一轉して「藥物としての人」の論題の下に「本草學和漢醫學に宿さるゝ根本假設の評論」を試みんとせられたるが如き、所謂錆びのある東洋味を活かした學的體系に傾想せられたやうである。先生が私に、づつと以前、手水鉢の蘚苔の滋味について、また割合最近に盆栽の雅趣について、述べられた斷片的言句の中に、我國社會科學者の研究にあらまほしく思はれたことどもを暗示せられたのは、實は先生の學風の一端と見ることが出來やう。

先生は、私が統計學を專攻することゝなるや、先づ Conrad の Statistik から出發して研究し、これが研究報告をなすべきことを命ぜられ、次いで Mayr, Westergaard, Newsholme 等の著作の研究に向ふべきことを示されたのであつた。常に若き學徒のため、子弟の爲め、何かと指導しまた研究の便宜を與へて、學界進出の機會を與へることを念とせられてゐたことに對して今更乍ら感謝に堪へない。

最後に、先生が恩師に對する情は實に厚いものがあ

つたやうである。私は先生から常に新渡戸先生のことを承つたが、その中、新渡戸先生が洋書の取扱ひの如何に鄭重であつたかを細々と話されたこともあつたが恐らく、先生は斯る一事に到るまでも其の美點を取り容れられたことであらう。